

ティラミスの魔法

カフェから始まる物語 3



作：はるゆき

「――ママ。もう朝だよ、起きて」

ゆさゆさと私の身体が揺さぶられる。だけど、布団に潜り込んだのはついさっきだし、身体が泥のように重たい。起き上がれそうにない。

「今日は仕入れに行く日だから、早く起きるのでしょ。お花、無くなっちゃうよう」

泣きべそ混じりで放たれた台詞に、私の意識は一瞬にして覚醒した。

「……翔太、今何時？」

「五時半だよ。だから早く起きて」

ガバッと布団を跳ね飛ばした。台所のテーブルの上には、ラップのかかったお料理が、既にレンジで温められて並べられている。翔太は電気ケトルのボタンを押すと、眠たそうにあくびを噛み殺しながら、椅子によじ登った。

私はキツネ色に焼きあがったトーストにジャムを乗せながら、ラップを次々に外して行く。柔らかなロールキャベツに、アスパラの肉巻き。そして、グリーンピースや人参入りの色鮮やかな卵焼き。ホワンと湯気と共に、美味しそうな香りが漂ってきた。

「お弁当、もらった？」

「うん。テツおじちゃんが、カッコイイの、作ってくれた」

自慢気にお弁当の蓋を開けて見せてくれた。卵焼きやアスパラの他にも色々な食材を使って、緑の草原に大きな恐竜が描かれている。私は思わず吹き出した。

「テツにい、相変わらずの凝りようね。」

翔太は大切そうにお弁当を包み直してカバンにしまうと、一瞬に朝ご飯を食べ始めた。

「翔太。幼稚園の時間はまだだし、眠たいでしょ」

「やだ。ママと一緒に食べる」

怒ったようにそう言うと、彼は私が思わず差し出したトーストにかぶりついた。

毎週三回買い付けに行く日は、いつもこんな感じだ。幼い翔太に無理をさせていることは本当に申し訳なく思っている。兄の哲郎には――翔太はテツおじちゃんと呼び慕っている――まともな男と一緒になれ、と言われるが、そのつもりは全く無い。

ひとしきり食べ終わると、慌ただしく身支度を整え始める。接客業は清潔感が命だ。黒髪をとかしてゴムでまとめる。化粧は派手にならない程度に。そんな簡素な身支度でも、翔太は「ママ、キレイ」と褒めてくれる。その言葉が私にとっては一番嬉しい。

時計を見ると六時になる五分前だ。

「じゃ、ママ行ってくるね」

車のキーを手に取ると、駆け寄ってきた翔太を抱きしめ、おでこにキスをする。玄関の戸を開くと、さっと差し込んできた太陽の輝きに思わず目を細めた。

(今日は祝日だからたくさんお客さんが来るはず。頑張らなくちゃ)

頭の中で、初夏に咲き誇る花たちがグルグルと駆け巡る。私は小走りに、駐車場へ向かった。

買い付けを終えて店に着くと、アルバイトの篠原さんが既に店の前で待っていた。
「あら、まだシフトの時間よりだいぶ前じゃない。どうかしたの？」
驚いて尋ねると、彼女はちょっと恥ずかしそうに顔を伏せた。
「いえ、実は早くに目が覚めてしまって。今日は祝日ですし、何かお手伝いできることがあればと……」
私は思わず頬が緩んでしまいそうになった。
(将来、花屋を目指しているというわけでもないのに……。なんてやる気のある子なのかしら)
内心感心しつつ「シフトを組んでいる以上次はダメよ」と釘を差してから、開店の準備を手伝ってもらうことにした。鉢の移動や、買って来た花たちを車から降ろすなどなどやることはたくさんある。
(どうしようかしら。肉体運動は悟くんに頼むとして……)
しばらく逡巡し、私はいいことを思いついた。
「――篠原さん。そろそろブーケ作りをやってみましょうか」
彼女の顔がぱっと明るく輝いたのを見て、思わず私も微笑んだ。

まずは私が幾つか花の種類を選んでお手本を見せることにした。
「初夏をイメージするわね。瑞々しいグリーンに白を合わせましょう」
並んでいる花々を見渡し、気になったものを手に取っていく。
「ビバーナムは別名グリーンアジサイ。そしてこちらのトルコキキョウは、色の種類が豊富なのだ」
トルコキキョウはバラのように大きな花びらが幾重にも重なっていて、とても見事だ。朝市で買って来たばかりなので、葉の先々まで瑞々しい。ビバーナムの美しい緑の間から、トルコキキョウの白い花が、顔を覗かせるように束ねていく。
「――はい。こんな感じかな」
出来上がった花束は、自分でも笑みが溢れるほど可愛らしい。
「素敵です」
篠原さんも微笑みながら花束を見つめている。
「じゃあ、今度はあなたの好きな色で作ってみましょう」
「――はい」
立ち上がると、彼女はゆっくり店内を回りながら一つ一つ確かめるように花を選んでいる。私がおその様子を見守っていると、やがて二種類の花を手に戻って来た。
「――店長、これで花束を作りたいと思うのですが……」
手にしていたのを見て、私はちょっと驚いた。それは早咲きのミニヒマワリと、美しい青色のデルフィニウムだった。
「どうしてこれを選んだの？」
尋ねると、ちょっと顔を赤くする。

「私、この青色がとても好きなのです。いつか花束を作れるようになったら絶対使ってみたい
と
思っていて。青色に合うのは何かなって、選んでいたのですけれど、ヒマワリの黄色がとても
鮮やかで綺麗だったので……」

自信がなくなっていくのか、どんどん声が小さくなっていく。でも、私は感心していた。

「篠原さん。『色相環』というのが合ってるね。相性の良い色の組み合わせがあるのよ。青色の反
対色は黄色なの。とてもいい組み合わせだわ」

お店では卓上花用に毎日、三種類のブーケを作っている。人気の高いピンク色は不動。あとは
その日の入荷しだいで決めて行く。今日は私の作ったトルコキキョウのブーケと、篠原さん作っ
たデルフィニウムのブーケでいってみたい。そのことを伝えると、彼女は赤くなっていた顔を更
に赤らめながら「ありがとうございます」と小声で言った。

私たちが花束を作っていると、悟くんが出勤してきた。篠原さんが作った花束を見て、驚いた
様子であったが「可愛いな」と褒めている。開店の時間が迫る中、私たちは慌ただしく、残りの
準備に取りかった。

いよいよ開店十分前。店の前では既に数人のお客様が開店を待っている。最終確認のため店内を
まわっていると、ポケットの携帯が震えた。

(――『哲郎』？ テツにいが開店直前に電話をしてくるなんて……)

ふいに嫌な予感に急いで通話ボタンを押すと、兄の焦った声が飛び込んで来た。

『礼子、大変だ。翔太が熱をだした。高熱だ』

「――え？」

『今すぐ病院に來い。ずっとうなされているんだよ』

苦しそうに私の名前を呼ぶ翔太が頭をよぎる。でも、足が、身体が動かない。

『聞いているのか？ 礼子――』

「店長、そろそろ開店します。準備お願いしま……店長？」

「今、行くわ――」

それだけ言うと、急に身体から力が抜けて行く。

(――翔太。私の大切な翔太。あの子に何かあったら、私は一体どうしたら)

不安が渦のように押し寄せてくる。

「店長。どうしたんですか、しっかりしてください！」

「どうしました。大丈夫ですか――店長？」

悟くんの焦った声に、様子を見にきた篠原さんと目が合った。彼女が瞬時に何かを感じ取って
くれたことがわかった。

「店長、あがって下さい。ここは私たちに任せて下さい」

「でも……」

「あと一時間もすればパートさんが来てくれます。それまでは二人で持ちこたえます。店長は早

く行ってあげてください」

悟くんは、オロオロと私達の様子を見守っている。

「篠原さん、でも――」

「大丈夫です。留守は、しっかり守りますから」

彼女は青ざめながらも、はっきりとそう言ってくれた。私はよろよろと立ち上がると、涙が溢れそうになるのを必死に堪えた。

「――ごめんなさい。すぐ戻るから」

それだけやっと言うと、心配そうな二人に後を頼み、カバンと車のキーを掴むと急いで店を出た。震える手でエンジンキーを回し、込みあがってくる不安を抑えてアクセルを踏んだ。車は滑らかに走り出し、哲郎の教えてくれた病院へ向けて走り出す。

(――翔太。ママ、今すぐいくからね)

窓の向こうは、嘘みたいにキレイな青空だった。

窓を開けると、日本のそれとはどこか違う太陽の光が、部屋にさっと差し込んだ。私は眠たい目をこすりながら洗面台に向かい、冷たい水でパシャパシャと顔を洗う。

「――ふう」

鏡の中の顔は、いかんせん疲れ切っている。

「昨日も遅かったからなあ」

単身フランスに来て一ヶ月。飛ぶように毎日が過ぎていった。語学学校に行きながら、花屋で修行する毎日は充実感はあるが、そろそろ身体が限界にきているらしい。

「今日は一日ゆっくり出来るし、のんびりしよう」

シャワーを浴びて、服を着替えると、ご飯を食べに行こうと外へ出た。

三月のフランスはまだまだ肌寒い。花曇りの空の下、トレンチコートの襟元を合わせて急ぎ足で歩く。アパートの近くのカフェへ飛び込んだ。

「ボンジュール、ビアンブニュ」

店内は暖かい。すっかり顔なじみになった店員さんが奥の席に案内してくれる。

「レイコ、ジュ・ヴ・ザデ？」

メニューの一番始めに乗っているサンドイッチを指差すと、彼はにっこり微笑んでオーダーを厨房に伝えにいった。

セーヌ川の畔にあるこのカフェは、今のところ借りているアパート以外で、一番落ち着ける場所だ。語学学校も花屋修行も勢いで何とかこなしている私にとって、心からのんびり出来る時間はほとんどない。店員さんがそんな私の心情を察してくれているかどうかは定かではないが、拙いフランス語にも笑顔で応えてくれることがとても有り難い。運ばれて来たサンドイッチを齧りながらぼんやりしていると、昨日店長に言われたことが頭をよぎる。

「――レイコ、あなたのアレンジは固過ぎるわ。もっとお花のことを考えてあわせないと。花の良さを殺してしまっているわ」

私が作った花束を見て、店長は眉を寄せた。わざわざ日本を離れ、この地に来たというのに腕が上達している実感があまりない。

(考えたくないけれど、私には才能がないのだろうか.....)

「こんにちわー」

カフェの入り口から聞こえた久々の日本語に私は思わず振り向いた。

戸口にくしゃくしゃの髪をした一人の青年が立っていた。モッズコートにブーツというカジュアルな出で立ちだ。彼は出てきた店員さんと何かごによごによと話している。しばらく話し込んだあと彼は奥の席、つまり私の席の近くにやってきた。どうやら面接らしい。気になって私が見ていると、店長である太めのおじさんが出てきた。彼の出した書類に目を通し、おじさんは満足気に頷いた。

「では、明日から、どうぞ宜しくお願いします！」

立ち上がって、大きな声で頭を下げた彼に、おじさんは満面の笑みを見せている。

(カフェの修行かしら――)

自分と同じような境遇の彼に、こっそり心の中で「良かったね」とエールを送ると、洗濯物が溜まっていたことを思い出した。急いでサンドイッチを飲みこむと、私はアパートに戻ることにした。

フローリスト・アンヌの店「クーロンヌ・ド・フルール」は今日もたくさんの人で賑わっている。

「レイコ。これを一つ、お願い」

マダム・エリーヌの差し出した花束は、店長のアンヌが作ったものだ。薄桃色の大きなランキユラスにイエローとオレンジの薔薇を添えた、見ていると心の底から明るい気分になれる花束だ。

「お腹の子ども、きっと喜ぶと思うのよね」

エリーヌは大きなお腹をさすりながら、うっとり薔薇の香りを楽しんでいる。

彼女は息子のネイサンを幼稚園に迎えにいったあと、このお店にやってくる。ネイサンはつまらなそうな顔で店の中をぶらぶらしていたが、エリーヌが他の花を見ている隙に私のそばにやってきた。

「レイコ、僕ね、大きくなったら日本へ行くんだ。だからね、日本語の勉強のために、今度『マンガ』を買ってもらおうんだよ」

嬉しそうに教えてくれる。綺麗に切りそろえられた、癖の無い金髪がサラ、と揺れた。

「そうなの。良かったわね」

微笑み返し、包み終えた花束をエリーヌに渡す。彼女は満足げに受け取ると、まだ私のそばにいるネイサンの名前を呼んだ。彼は不服気な視線をちらと母親に向けると、寂しそうに呟いた。

「最近のママは、もうすぐ産まれてくる赤ちゃんのことで頭がいっぱいなんだよ」

「そんなことないわ――」

「だって、いつも赤ちゃんのことばかりパパと話しているんだ。それに僕の話をも全然聞いてくれないんだもの」

「ネイサン……」

言葉を探しているうちに、彼は悲しげな一瞥をして、エリーヌの元へ走って行ってしまった。

「どうしたら良かったのかしら……」

こういうとき、口下手な自分が嫌になる。言葉の壁もあるだろうが、どちらかというところ、気持ちの問題だ。心の中では半分くらい、歳の近いエリーヌの気持ちもわかってしまう。

気落ちしながらも作業を続けていると、店の奥からアンヌが出て来た。歳は三十代後半。大柄で逞しい彼女の腕から繊細な表情の花束が作り上げられていく様子は、いつ見ても心が踊る。

私は彼女を素晴らしいアーティストとして尊敬していたが、彼女のほうは私を全くといっていいほど信用していないことを痛いほど感じていた。スタージュとして受け入れてはくれたが、日本から来て間もない、言葉も片言でしか通じないペーパーの花屋見習いを持って余っていたのかもしれない。

「レイコ、ちょっと……」

彼女は店の奥にある事務所に来るよう、目で合図をした。

(何だろう……)

アンヌと二人きりになるのは、この店に来て初めてのことだった。嫌な予感を抱えつつも仕方なく後に従った。

「実は、あるカフェから注文があったの。店内のフラワーデザインをうちに依頼したいということよ」

狭い事務所の中、目の前のアンナは、私に背を向けて腕組みをしている。

「“ランデブー・ド・リビエール”という店よ。その仕事をレイコに任せたいと思っている」

「——はい？」

私は耳を疑った。修行を初めて間もない私に、そんな大きな仕事を任せるとするのは一体どういうことなのだろう。まさか本当は、アンヌは私のなかの眠れる才能に気付いていて、それを育てさせようということなのだろうか？ しかし、振り向いた彼女の顔を見てそんな淡い期待は即座に崩れ去った。

彼女はまるで氷のように冷たかった。ただただ、冷たい眼差しで私を見下ろしている。

(——これはきっと、失敗したらクビになるということだわ)

「明日からレイコにはそちらの担当になってもらう。花は店のストックを使っていいわ。ただし共用なのだから、必ず私に一言相談してからにきなさい。……やりますか？」

問われていても、拒否権はない。胃の底がぎゅっと掴まれるような感覚になりながら、私はゆっくり首を縦に振った。

アンヌが知っていたかどうかは知る由もないが、ランデブー・ド・リヴィエールは、私の行きつけの川沿いのカフェだった。

(良かった。少なくとも始めましての人達でなくて本当良かった.....)

しかし安心ばかりはしてられない。家に戻るなり、机の上にカフェの見取り図を広げると、お店のストックの花リストを覗んだ。

(確か、入り口が北側にあって日が差し込まないから寒々しい雰囲気だったんだわ——)

薄灰色の壁に、焦げ茶色の床。花の都パリのカフェと言うには、いささか地味な装いだ。

(そういえば、まだ何回か行っただけだけど、いつも混み合っていなかった。観光客や、お洒落なパリっ子で賑わっていないところが、むしろお気に入りだったのだけれど——)

少し古くなったパンを齧りながら、私はその後一睡もすることなく考え続けた。

夜が明け、窓の外が白み始めるころ、部屋の中の気温はぐっと下がる。余りの寒さで目が覚めた。

「——頭痛い」

ふらふらとキッチンへ向かって、お湯を沸かす。ケープを身体に巻き付けて、ぼんやりしながら沸騰するのを待った。熱いお湯で、目が覚める程苦いコーヒーを淹れる。啜りながら机に戻ると、散乱した筆記用具と一晩考え抜いたお花の図案があった。

「とにかく、やってみるしかないわ」

言い聞かせるように呟くと、出掛ける準備に取りかかった。

まだ開店する前のカフェに到着すると、私はそっと裏手に回った。どこかに従業員用の入り口があるはずだ。

(挨拶に伺うには、どこから周ればいいのかしら.....)

壁と壁の間の細い空間には、大きなゴミ箱が幾つも並んでいて、人の気配は全くない。

(入口、無いのかしら.....)

「その人、この店に何か用？」

突然声をかけられて私は文字通り飛び上がった。周りを見回しても、声の主が見当たらない。

「こっちだよ、上」

「.....上？」

よく見ると、コンクリートの小さな階段状のものが上に向かって伸びている。その上の踊り場のようなところに男の人がいてこちらを見下ろしていた。

「お客さん、じゃなさそうだね」

「す、すみません。私、クーロンヌ・ド・フルールの者です。フラワーアレンジメントの件で伺いまして.....」

慌てて頭を下げたところで、彼がこの間、面接をしていた日本人の青年だと気がついた。

「フラワーアレンジ……。ああ、この間オーナーが言っていたやつかなあ。ちょうどいいや。僕が担当者です。どうぞ、こちらに」

彼は踊り場のドアを開けると、さっさと部屋に入ってしまった。

(……じゃあ、これを登るとのことね)

目の前の頼りない階段状のでっぱりを見上げると、私は小さくため息をついた。

恐る恐る階段を登り部屋に入ると、恐らく事務所なのだろう。大きい机が一つと、レシピや資料が雑多に詰め込まれた本棚が置かれていた。壁際の古いスピーカーから、ゆったりとした音楽が流れている。少し薄暗いが、静かで暖かく、なかなか居心地が良さそうな部屋だった。

(さっきの人はどこに行ったのかしら――)

どこにも姿が見えないので、待っていればいいのか部屋の中をキョロキョロとしていると、壁際に大きく掛けられたコルクボードが目に入った。

(何かしら?)

近づいてよく見ると、たくさんの記事や写真が貼られている。

――料理だ。それも和食を始め、パスタやビーフシチュー、パエリアなど様々だ。

「……美味しそう」

「でしょ？」

「キャ！」

いきなり後ろから声を掛けられ、思わず私は尻餅をついてしまった。

「ごめん、ごめん。そんなに驚くとは」

部屋の奥に、細く開いていた扉から、先ほどの男性がいたずらっぽい笑顔を覗かせていた。

「ちょ……。びっくりさせないで下さい！」

「怒らないですよ。まだ開店前だし、ここ飯屋だし。せっかくだから、ご飯でもどうかな、と思っ

て」それを聞いて、私の眉は、やや下がった。言われてみれば確かに彼のほうから美味しそうな、そして懐かしい香りが漂ってくる。彼はニヤニヤしながら聞いてくる。

「――いらない？」

「ッ――」

開きかけた口が言葉を発するよりも早く、私のお腹が特大の音量でグー、と鳴った。

彼が作ってくれたのは何と、インスタントラーメンだった。とろとろの卵と、たっぷり野菜とキノコを入れた味噌味のそれはまぎれも無い、日本で慣れ親しんだ味だった。

「――すごく美味しいです！」

懐かしさに、ともすれば涙が出そうになりながら、私はガツガツと麺を啜った。

「ハハハ。非常食でこんなに喜んでもらえるとはね。今、店の開店準備でこれしかなくて」

「……開店準備？」

「そう。この店をゆずってもらったんだ」

「そうだったんですね」

「俺は、オーナー兼、メインシェフ。前オーナーが、備品や機材ごと譲ってくれたから、すぐにオープンするよ。……と、自己紹介がまだだったね。園田歩です。どうぞ宜しく」

「私は、クーロンヌ・ド・フルールの狭山礼子です」

「狭山さんね。花屋さんの経験は長いの？」

丁度ラーメンの最後のスープまで一気に啜ってしまったところで、私は箸を置いて居住まいを正した。

「まだ見習いとして働き始めたばかりです」

園田さんは、フム、と顎をさすって天井を見た。

(やっぱり、見習いじゃあ仕事を任せられないということかしら……)

緊張で体を強張らせる私に彼は向き直った。

「狭山さん」

「はい」

「こんな外国で、日本人の俺らが出会ったのは、きっと何かの縁があるにちがいない。君に依頼するよ。オープンは三日後。宜しく頼む」

「……こちらこそ、宜しくお願いします！」

私は力いっぱい頭を下げた。

園田さんの注文は『とにかく目立つ、大きなスタンド花』『店内のあちこちに花を飾り、女の子が喜ぶような雰囲気を作って欲しい』ということだった。

「明るい色味のものがいいな。思わず足を止めたくなるような……。店内は逆に居心地の良い、落ち着いたものがいい」

「――わかりました」

要望をまとめると、アンヌに相談するために花屋に向かった。私の説明を聞くとアンヌは途端に眉を寄せた。

「――大量に花が必要になるわ。でも、他にも大口の注文が入っているの。とてもじゃないけれど、店のストックでは足りないわね。花市場は今日だったし、次に開かれるのは四日後。...
...オープンには間に合わない」

いつもは溢れんばかりにストックが入っている保冷庫を睨みながら、淡々と彼女は言う。

「.....でも」

「こういうことは時々あるの。どうしたらいいのか、考えなさい」

それだけ言うと、彼女は私の顔も見ずに行ってしまった。

(そんなことを言われたって.....)

悔しさに涙がどんどん溢れてくる。保冷庫の前で、私は一人止まらない涙を拭い続けた。

アパートに戻り、ただちにパソコンのスイッチを入れる。少し埃をかぶっていたそれは、ゆっくりと起動を始めた。

(.....見てなさい。どこまで出来るかやってやるわ)

アンヌを頼りにすることは出来ない。それがはっきりとした今、心の中に不思議と冷静な自分がいた。ひとしきり泣いたおかげで、ショックも落ち着いた。

(やるべきことは、目の前にある課題をどうにかすること。とにかく売ってもらえるところを見つけなきゃ)

インターネットの検索画面に出てきた結果を片端からメモすると、電話のプッシュボタンを押した。

「.....アロー？」

どきどきしながらも、メモの上から順々に電話をかける。しかし、私がアジア人かつ花屋見習いと聞くとみんな電話を切ってしまう。時計をみると午後の三時を回っていた。何一つ進まないなか、時間だけが進んでいく焦りに、頭がくらくらしてきた。

(――気分転換したほうが、いいかな)

煮詰まったときは散歩が一番。こう教えてくれたのは大好きな母だった。繰り返す同じ言葉を聞いているうちに、すっかり自分の中に根付いてしまった言葉だ。

(外の空気を吸いに行こう)

私はコートを掴むと、家の外に飛び出した。

セーヌ川沿いの道は散歩にはぴったりだ。風は冷たいけれど、歩いているうちに気にならなくなってくる。歴史を感じさせる、豪華な造りの建造物を眺めながら歩いていると、今自分がこの場所にいることが不思議に思えてきた。

(今頃日本ではきっと、兄さんはオープンしたばかりのカフェで奮闘しているのだろうなあ)

十年歳が離れた彼が父親代わりをしてくれたおかげで、今自分がここにいられる。

(.....へこんでいる場合ではないわよ。礼子)

ため息をついたその時、突然裾を引っ張られた。驚いて見下ろすと、金髪の少年がこちらを見上げています。

「ネイサン！」

「レイコ。こんにちは」

慌てて見渡したが、マダム・エリーヌの姿はどこにも見えない。

「お母さんはどうしたの？」

「僕、家出した」

「――え？」

「ママが、もう僕のこと知らないって。だから家出したの」

(.....きっと喧嘩したのね)

エリーヌは、息子のことをとても大切に思っている。それは普段の様子から見てよくわかる。(仕方ないわ。帰ったらアンヌに連絡して、エリーヌの電話番号を教えてもらおう。それまでは.....)

「ネイサン。私と、お散歩する？」

そう言うと、彼の小さな手がすぐに私の手を掴んだ。

私たちは、日本のマンガやアニメについて話しながら散歩を楽しんだ。

「友達も皆好きだよ。パソコンで動画が見られるし」

「そうよね。ネイサンはどんなものが好き？」

「僕は、ロボットが出てくるものかな。パパも好きだから、よく一緒に見るよ。.....最近は、ママと買い物に行ったりして、赤ちゃんのことばかり話しているけど」

シュンとうなだれ気味に俯うつむいてしまう。私は明るい声で聞いてみた。

「でも、弟か妹ができたら一緒に遊べるじゃない」

「きっと、ママとパパと赤ちゃんと三人で仲良くするんだよ」

「そんなことないわよ。きっと、お兄ちゃんって。頼りにされるわよ」

「そう、かなあ.....」

ネイサンはちょっと考えこんだ。そのとき、彼のお腹がグーツと鳴った。

「あ、違うの。お腹の音じゃなくて.....」

そのとき、一段と高い音でもう一回、お腹が鳴る。

「.....もしかして、ご飯食べてないの？」

「ううん。お腹も、空いてないよ」

涙目で、必死に我慢しているのが良くわかる。私は思わずしゃがみこむと、彼と視線を合わせた。すると、彼は堰^{せき}を切ったように話し始めた。

「――ママに、奢^{おご}ってもらったりしてはダメだって言われているんだ。それにレイコは見習いで、大変だけどころか頑張っているんだって。だから、迷惑かけちゃいけないんだ」

(それで、お腹が空いていること言い出せなかったのね)

何ともいじらしい気持ちになったが、顔には出さないように私は言った。

「ちょうど、うちに美味しいパンがあるから一緒に食べない？ 一人で食べるには多すぎるほど買ってしまったの」

「……いいの？」

「ええ」

私がにっこり返すと、彼はホッとしたように息を吐いた。

(とはいっても、うちに美味しいものなんてあるわけではないし……。どこかに寄っていこうかしら)

財布の中身を考えながら思案していると携帯が震えた。画面に「園田歩」という文字が出ているのを見た瞬間、胃の辺りがズキツとした。

(――どうしよう。お花についてはまだ何も決まっていないわ)

恐る恐る通話ボタンを押すと、私の心情とはうってかわって、園田さんの明るい声が耳に飛びこんできた。

「狭山さん、今忙しい？」

頭の片隅に「そうだ」と答えるべきだという考えがよぎったが、私は小さい声で「いいえ」と答えていた。

「食材の入手ルートの契約が終わったんだ。インスタントラーメンじゃあ、料理人として納得がいかないからさ。良かったら食べに来ない？ 腕によりをかけて飯、作るよ」

私はちらりとネイサンの様子を盗み見た。彼は、ぼーっと川を眺めていて、心ここにあらずといった様子だった。すきっ腹が限界に近づいているようで、一刻も早く何か食べさせてあげたほうが良さそうだった。

「あの、実は二人連れなんですけれど……」

事情を話すと電話の向こうで、クスリと笑う声が聞こえた。

「構わないよ。料理は、食べる人も、作る量も、多いほうがいからね」

準備しているから早くおいで、と彼は言った。

「――カランコロン」

カフェの戸を開けると、中からフワンと良い香りがした。店内にはゆったりとした音楽が流れ、テーブルや椅子は綺麗に並べられている。まるで既に開店しているような雰囲気だ。

「いらっしやい」

お店の奥から、グラスを磨きながら園田さんが顔を出した。くしゃくしゃな髪はいつもどおりだが、黒いシャツに真っ白なエプロンを付けている姿は、料理人オーラが出ている。

「面倒な手続きは殆ど終わったんだ。開店までに調理場に馴染んでおきたくてね。二人とも、嫌いなものはあるかい？」

私達が首を横に振ると、彼は<本日のメニュー>と書かれた紙を渡してくれた。そこには大きな文字で、

一：美味しいもの 二：楽しいもの 三：元気が出るもの

と、書かれていた。

「……何ですか？ これ」

「開店前だからさ。ちょっとした遊び心」

ニツと笑った園田さんに、ネイサンは瞳をキラキラさせた。

「この、二番の『楽しいもの』ってなに？」

「それは注文してからの楽しみ～」

「僕、二番目がいい！」

「……じゃあ、私は三番目をお願いします」

「了解～」

鼻歌を歌いながら園田さんの姿が厨房に消えてしまうと、ネイサンがこそっと耳打ちをしてきた

。

「……彼はレイコのボーイフレンドなの？」

私は思わずブツと吹き出した。

「まさか、違うわよ」

「じゃあ、どうしてご飯を御馳走してくれるの？」

「それは……、私がここのお店のフラワーアレンジをすることになって」

そこまで言って、私は彼が家出をしていたことを思い出した。

「ちょっと仕事の電話をしてくるから、待っていてくれる？」

「うん。わかった」

楽しいもの、なんだろ～と、足をぶらぶらさせているネイサンを一人残し、私はお店の外に出た。クーロンヌ・ド・フルールの番号をプッシュする。しばらく電子音が鳴った後、『アロー？』と不機嫌そうな声が聞こえた。

「――アンヌ？ 私です。レイコです」

「ああ。花が無くて大変だと思うけれど、大丈夫なの？」

「はい、何とかします。ところで、マダム・エレーヌの連絡先ってご存知ですか」

私の質問に、受話器の向こうの気配が固くなった。

「もちろん知っているわ。でも、お客様の大切な情報は――」

「実は今、彼女の息子のネイサンと一緒にいるんです。どうやら家出を試みたいで……」

「何ですって？」

「エレーヌに迎えにくるよう連絡してもらえますか」

「――わかったわ。今どこにいるの」

カフェの場所を伝えると、大きなため息が聞こえた。

「必ずマダムに連絡するわ。それまであなた、責任をもってネイサンを預かるのよ」

「は――」

返事をしている間に、電話は切られてしまった。

(……言われなくてもわかっているわよ)

私は小さくため息をついた。

(園田さんの『元気が出るもの』たくさん必要そうだわ……)

店に戻ると、ネイサンの嬉しそうな笑い声がする。

「どうしたの？」

「レイコ、これを見て。彼は天才だよ！」

彼の目の前のプレートには、瑞々しい野菜のサラダと共に、大きなタイヤキのようなものが置かれていた。

「こんなに可愛いと、食べるのがもったいないよ！」

「まあまあ。そう言わずに、一口どうぞ」

ネイサンはおそるおそる、はじっこをパクっと齧った。

「――セ・ボン！ これ、キッシュだ〜」

「当たり。ほうれん草とじゃがいもをクリームで和えたんだよ」

「すごい！ こんなキッシュ初めて。可愛いし、美味しい〜」

ネイサンはほっぺたを紅潮させ、にこにこことスプーンを口に運んでいる。園田さんは彼の様子を見て、嬉しそうに微笑みながら私にお皿を差し出した。

「こちらが、狭山さんの分」

漂ってくる香りに、思わず唾が口のなかに湧いた。

「焼鮭とほうれん草のおひたしです。――白米もあるよ」

お箸を受け取ると、鮭を一口分摘み上げる。切り口からは、白く美しい湯気が立ち上り、淡い照明の元でゆらゆらと揺れる。私の様子にただならない何かを感じたのか、ネイサンは食べるのを止め、こちらを見た。

(ああ……、この香り……)

焼鮭特有の香りが鼻孔をくすぐる。私はそれを思う存分堪能すると、ゆっくり口に運んだ。途端に懐かしい味が口一杯に広がっていく。白米も、甘く噛み応えがある。私は急にこの異国の地が、海を経ても我が家とちゃんと繋がっているのだ、という実感を得た。

「塩で下味を付けて焼いただけだけれど、それでも充分だろ」

「――はい。とっても美味しいです」

あとはもう、ただただひたすら味わって食べた。

食事が終わると園田さんは、ブルドネージュというアーモンド入りの焼菓子と紅茶を御馳走してくれた。満ち足りた気分が私達がそれを味わっていると私の携帯が鳴った。電話をかけてきた相手は、花を売って欲しいと最後に頼んだ相手だった。

「お嬢さん、花が買えるところは見つかりました？」

優しいおばあさんの声だ。断られたときも一番丁寧で、そして申し訳なきような様子だった。

「いえ、それが……」

口ごもった私の様子から察してくれたのか、労わるような口調が聞こえてきた。

「思い出したんだけど『植物の庭』という場所をご存知？」

「いえ、聞いたことはありません」

「そこならね、もしかしたらあなたの欲しいものが手に入るかもしれないわ」

話を聞くとその名の通り、広大な敷地の庭にたくさんの種類の植物が植えられている場所らしい。気に入ったものがあれば買うこともできるというのだ。花屋で売られているものと違って下処理は自分で行う必要があるが、安く手に入れることができるという。場所はパリ郊外で、車で一時間もあればいけるということだった。

(安く手に入れられるならそれにこしたことはないわ。これは、行くしかないわね)

願ったり叶ったりの情報だ。嬉しくなり、私は思わず大きな声でお礼を言っていた。

「……ありがとうございます！」

「レイコ、どうしたの？」

「お花を売ってくれるところが見つかったの！ 良かった。これで仕事ができるわ！」

「へー、それは良かったじゃない」

(大変、園田さんの前だった！)

焦る私に全く構わない様子で彼はにこにこしている。

「もし良かったらさ、俺、明日は空いているんだ。一緒に行ってもいいかな？」

「――へ？」

思わぬ提案に思わず間抜けな声が出てしまった。

「実は開店準備の期間はほとんど事務手続きの時間だったんだ。調理機器は前のオーナーさんが全部残してくれたし、スタッフも前から働いている人がそのまま続けてくれるっていうから、明日は特にやることなしなの」

(本当にそんなものなのかしら……)

しかし、当の本人はのんびりしている様子である。それならば、一緒に行ってお花を選んでもらっても良いのかもしれない。

「そういうことなら……お願いします」

「やあ、明日はピクニックだなあ〜。あ、車は俺が出すよ」

彼の呑気な様子を見て、私は思わず笑ってしまった。黙って私たちの会話を聞いていたネイサンが、突然声をあげた。

「明日、僕も行きたい！」

「え？ でもネイサンはお母さんのところに戻らないと」

「レイコ。ママは僕のこと探しに来ないもの。だから明日、一緒に行く」

「でも……」

私が口ごもると、代わりに園田さんになるほどねーと頷いた。

「ネイサンは家出少年か。まだ小さいのにやるなあ」

「園田さん？」

思わず咎める口調で言った私に、彼は頭をかいた。

「ああ、悪い。まあでも、お母さんのところに帰れないんじゃあ、今日は泊まるしかないだろう」

言われてみれば、日はとっくに沈んでいた。

(そういえば、アンヌからもまだ連絡来ないわね。どうしたのかしら……)

私の心配をよそに、ネイサンは園田さんの提案に顔をパツと輝かせた。

「僕、ソノダの所がいい。レイコも好きだけど、男同士の方が気楽だもん」

すっかり彼に懐いてしまったようだ。園田さんも嬉しそうに笑っている。冗談っぽく、

「俺は構わないぞ。何なら、レイコさんもここに泊まるか？」

(ネイサンをここに残していくわけには行かないわ。本来ならばアパートに戻るべきだけど、あそこは二人で眠るには狭いし――)

しばらく逡巡し、とうとう私は腹を据えた。

「私も、ここに泊まります！」

面食らった園田さんの表情に、思わず笑ってしまった。

その夜、私達は遅い時間までトランプゲームをやったり、ネイサンにせがまれて日本の話をしたりと、楽しい時間を過ごした。中でも世界各地で料理修行をした園田さんのお話はとても面白いものだった。

「僕も大きくなったら、ソノダみたいに世界を旅したいなあ」

「ハハハ。でもまあ、そろそろ眠るとしようかね。それじゃあレイコさんもこちらへ」

彼はあくびを噛み締めているネイサンをひよいと抱き上げると、カフェの二階へ運んで行った。事務所の部屋を通り過ぎ、更にその奥に進んで行く。

「ここはゲストハウスとして使用する予定の部屋なんだ。料理修行に来た人とか、あとはまあ、スタッフが帰れなくなったときとか」

小さな小部屋にはベッドと机が二つずつ並べられている。ネイサンを片方のベッドに降ろしながら、

「狭いけれど勘弁してね。俺は下で眠るから」

と、すぐに部屋を出て行ってしまった。

(お礼は明日言おう。そういえば園田さん、ネイサンが私をレイコと呼ぶからいつの間にかうつつっていたわ。でもまあとにかく、今日はもうクタクタ.....)

既に寝息を立てているネイサンの隣で私もベッドに潜り込むと、あっというまに深い眠りに落ちて行った。

目が覚めると、見慣れない天井にドキッとした。

「——ここ、どこだっけ」

隣を見ると、スヤスヤと安らかな寝顔のネイサンがいる。ぼんやりしている頭の中が、だんだんはっきりとしてきた。少し開いた扉の隙間から、包丁が刻む心地よいリズムが聞こえてくる。私はそっと布団を抜け出すと、ひんやりとした石造りの階段を降りて行った。

キッチンに近づくと、ジュージューとベーコンの焼ける音がする。しかし、そこには誰の姿もない。

「おはよう。悪いけど、そこの卵、ベーコンの上に落としてくれる？」

後ろから大量に野菜を抱えた園田さんに声をかけられ、私は言われるがまま慌てて卵を片手に取ると、立て続けに三つ割った。

中からオレンジ色の盛り上がった黄身が、座布団の上に収まるようにとろんとベーコンの上に滑り落ちる。野菜を仕分けながらその様子を見ていた園田さんは軽く驚いていた。

「片手割りできるの？　すごいな」

「兄が調理師なんです。私もよく手伝わされて」

「へえー」

「レイコ、ソノダ、おはようー」

欠伸をしながらネイサンが降りてきた。

「おはよう。朝ご飯、もう出来るからな。座って待っていて」

「は〜い」

半熟に仕上がったベーコンエッグ。きつね色に焼けた小麦入りのパンに、山盛りのバターがテーブルに並ぶ。ホクホクしたジャガイモと柔らかいアスパラのスープ付きだ。

「すみません、昨日からご馳走になってばかりで……」

三人分、濃いオレンジジュースを注いでいる園田さんに声をかけると、彼は笑った。

「気にしないで。俺は根っからの料理人だから、目の前にお腹が空いている人がいたら、その場で出来る美味しいものを出したくなるのさ。こんなに可愛いちびっ子とお嬢さん相手なら尚更ね」

「ソノダのご飯はすごく美味しい！　僕、お店が開店しても食べにくるよ」

「本当？　それは嬉しいな。さ、冷めないうちに召し上がれ」

ご飯はどれもとても美味しく、私とネイサンはたくさんお代わりをした。

(こんな日常、いいなあ……)

私はそんなことを考えながら、スープを飲みほした。

車を走らせると、街を抜ければすぐに、郊外らしい開けた景色に変わっていく。ネイサンは窓を

開けて、気持ち良さそうに風を楽しんでいる。

「パリの街並みも綺麗だけれど、こういった雰囲気も素敵ですね」

「うん。特にフランスは、中心部がはっきりとしている国だからね。しかし、空気はいいしのどかだし、俺はやっぱりこういった雰囲気のほうが気楽で好きだなあ」

運転をしている園田さんは、景色を楽しそうに眺めている。

しばらく行くと、教えてもらった場所らしきところが見えてきた。広々とした敷地に、たくさんの畑や花壇、ビニールハウスが並んでいる。その入口付近には、石造りで蔦の絡まった、見るからに古めかしい建物が建っていた。

車が庭園に入っていくと、緑色のチョッキを着た髭を蓄えたおじいさんがこちらへ歩いてきた。私は車から降りると、彼に挨拶をした。

「こんにちは」

「やあ、いらっしやい。家族で見学かい？」

おじいさんが車を覗くと、園田さんとネイサンが軽く会釈を返す。

「あ、いや。家族ではなくて、花の買い付けにきたんです」

「おや、そいつは失礼したね。私はこのオーナーです。あなたは初めて見る顔だね？」

「はい」

おじいさんは髭を^{しご}扱きながら、ホッホと笑った。

「私の記憶力はまだまだ現役ということだな。好きなところをみて回って下さい。ところで君は、ニホン人？」

私が頷くと、おじいさんは家の裏側を指差した。

「あっちにある丘の上に、桜の木があるよ。ぜひ見て行くといい。咲くにはもうちょい時間がかかるがね。」

私は一刻も早く買付の花を下見に行きたかったが、桜と聞くとどうしても心惹かれるものがある。

「.....どうする？」

園田さんの問いに、ネイサンが答えた。

「ニホンで有名な木、見てみたい！」

私の顔を見たおじいさんは、にっこりと笑った。

「買付にきたと言っていたが丁度先頃、滞っていた南部地方からの入荷がきたんじや。庭園で育てているものと合わせても今日はたくさんあるから、好きなものを選べると思うよ。花は逃げないから、ゆっくり見てくるといい」

その一言で、心は決まった。私たちはおじいさんにお礼を言うと、家の裏側に向かって車を走らせた。民家の少ないのどかな田園風景の先に、それは目の前に現れた。

広い丘の上に、何本もの桜の木が植わっている。芽こそまだだが、日々温かくなる空気を感じてか、樹々全体が薄ら桃色を帯びている。

私たちは車を降りて、木の間を歩き始めた。

「これは、もうすぐ咲きそうじゃないか。満開になるころにまたきたいなあ」

「僕も見たい！ママにも見せてあげたいな」

「そうね。エレヌはきっと、喜ぶわよ」

そこへ大きなカゴを背負ったおばあさんが通りかかった。

「こんにちは。あなたたち、ニホン人ね。あと、一ヶ月くらいしたら、とっても素晴らしい景色になるわよ。ぜひまた見に来るといいわ。.....あ、そうそう」

おばあさんは背負っているカゴから何かを取り出した。

「良かったら、一本お裾分け。さつき^{すそわ}剪定したものなの。次の花市に出そうと思っていたんだけど、ちょっと小さくってね。良かったらもらって頂戴」

おばあさんが差し出したのは、確かに小ぶりではあったが、太い見事な枝だった。

「.....いいんですか？」

「もちろん。私ね、若い頃ニホンに行ったことがあるの。そこで満開の桜を見て『お花見』をしたことは、今でも忘れられない思い出よ」

クスリと笑うと、おばあさんは丘を降りて行った。私はちょっと考え、その枝をネイサンに差し出した。

「これをぜひエレヌに見せてあげてよ。桜は大切に育てれば、刺し木で増やすことができるわ。きっと喜ぶわよ」

ネイサンは何も言わなかったが、受け取った。そして大切そうにそれを胸に抱えた。

「——それじゃあ、買い付けしにいかがか」

名残惜しい気持ちで丘を降りながら、本当に満開の季節、もう一度ここに来たいと私は思った。

広い庭園をくまなく周り、たくさんの花を車に摘んで私達は『植物の庭』を後にした。御会計のときに、もう一度おじいさんに会うことが出来た。私の選んだ花を見ると、

「これは、中心街の花屋の人たちが買い取りたがると思っていた物だよ。君はなかなか目の付けどころがいいねえ」

と褒めてくれた。南部の花たちは彩も鮮やかで美しいが、庭園の花たちも、生き生きとした美しい色合いの花たちばかりだった。

(手入れがいいし、何より育てている人たちが花を本当に愛している.....。またここに買い付けにこよう)

車窓に過ぎていく田園の景色を眺めながら、私は花屋として一つ大きな手応えを得ることができた実感を噛みしめていた。しかし、一息いれている時間は無い。これでやっと仕事が始まるのだ。

カフェに戻る途中、私の携帯にアンヌから電話がきた。

「今どこにいるの？ カフェの前にいるけれど、誰もいないじゃない！」

「アンヌ。私たち、花の買い付けに出ているんです」

「なんですって？ ネイサンを連れていったの？ ——まあいいわ。エレヌの居場所

がわかったの。彼女はセントラルホスピタルで入院しているわ」

「入院？ どうして――」

「道で倒れていたんですって。まだ意識が戻っていないの」

「そんな」

「とにかくあなたは、ネイサンを連れて今すぐホスピタルに向かいなさい。いいわね？」

「はい。わかりました」

電話を切って二人に伝えるとネイサンはすっと顔色が悪くなった。そして黙って私にしがみついていた。園田さんは何も言わずに車の進路を病院に向けると、アクセルを踏み込んだ。

受付で案内された産婦人科の廊下の先に、アンヌが一人待っていた。彼女は私達に気づくと、急いで駆け寄って来た。

「ネイサン！ あなた、何ともない？ 大丈夫なの？」

「僕は大丈夫。――ママは？」

「こっちよ」

そこは小さな一人部屋で、窓際のベッドに白い顔をしたエレーヌが寝かされていた。側にはスーツ姿の男性がいて、しっかりとエレーヌの手を握っている。

「旦那さん出張中だったみたいで、会社のほうから連絡がいったらしいの。ついさっきこちらに到着したのよ」

こそっとアンヌが耳打ちして教えてくれた。

「――ママ！」

ネイサンが飛び出して行くと、エレーヌはうっすらまぶたを開けた。息子の姿を認めると、ゆっくり起き上がって両手を広げる。

「ママ、大丈夫なの？」

「ええ。どうやら、予定より少し早く赤ちゃんが外に出たがっているみたい」

「ママ、ごめんなさい。赤ちゃんもちゃんと面倒を見て、しっかりしたお兄ちゃんになるから。早く元気になって」

「――ネイサン」

エレーヌの瞳から涙が溢れる。旦那さんも二人を穏やかに見つめていた。その様子を見届けると、アンヌは私だけ廊下に出るように目で合図した。

「ほっとしたわ。エレーヌもあの様子なら大丈夫そう」

「ええ――」

「でもレイコ。あなた一体どういうつもり？ ネイサンをきちんと保護するどころか連れ回して。そもそもソノダはクーロンヌ・ド・フルールにとってはお客様なのよ。そのお客様にお世話になるなんて、言語道断」

「――すみません」

「あなたはプロとしての意識が欠けているわ。このことが他の花屋に知れ渡ったら私は大恥をかくのよ。――申し訳ないけれど、あなたはクビ」

「……え？」

「他の店に行くか、ニホンに帰るべきよ」

それだけ言うと、アンヌ私の顔を見ることもなく行ってしまった。

病院から戻る間、私は一言も話さなかった。園田さんは何も言わず、また何も聞かなかった。カフェに戻ると、薄明かりの静かな店内で私は一人、ぼーっとしていた。

『あなたはクビ』

アンヌの言葉が頭の中をずっとグルグル回っている。

「――とにかく、お花の処理をしないといけないわ」

立ち上がろうとしたが頭がクラクラして、もう一度座り込んでしまった。コトツと側に何か置かれた音がして顔を上げると、園田さんが向かいに腰掛けたところだった。私の前には温かなハーブティーと小さなケーキが乗ったプレートが置かれている。

「今、お腹空いていません」

「まあまあ、そう言わずに。ゆっくりでいいからさ。一口入れてみてよ」

私はしぶしぶスプーンを取った。たっぷりとココアパウダーがかかった端っこを、ほんの少し掬って口に入れる。すると滑らかで濃厚なクリームと、ほろ苦いコーヒーの香りがフワっと鼻にかけて広がっていく。

「――美味しいです」

「それは良かった」

園田さんは自分のマグのお茶を一口飲むと、キッチンに戻っていった。私はもう一口、ティラミスを入れた。

――甘い、苦い、甘い、苦い。

辛いことの次にはきつと、良いことが待っている。

(落ち込んでなんかいられない。私はまだここで、やりたいことがあるのだから)

顔を上げると、目の前には買って来たばかりの花たちが待っていた。私は今度こそしっかり立ち上がると、仕事に取り掛かった。

病院に到着すると、テツにいが待合室で待っていた。

「――翔太は？」

「今診察中。こっちだよ」

彼は廊下の一番奥の部屋に私を連れていった。消毒液の香る診察室の中に、顔を真っ赤にした翔太がベッドに寝かされていた。私は駆け寄るとすぐさま翔太の手をぎゅっと握った。小さな手は熱く、とても苦しそうだ。

フサフサな眉毛の優しくそうな先生が私に声をかけた。

「こんにちは。お母さんですね」

「先生。翔太は大丈夫なんですか？」

「心配いりません。ただの風邪ですよ。お薬を出しますので、帰りに受け取って下さいね」

私の中で張り詰めていた糸が切れた。視界が歪み、涙が溢れそうになる。

「お母さん。お兄さんから聞かせて頂きました。シングルマザーは大変ですが、こんな小さい子供に無理をさせちゃいけませんよ」

「はい……」

先生の話聞きながら、私は心の中で翔太に謝り続けた。

(ママが悪かった。翔太。本当に、本当にごめんね――)

その時、握っていた小さな手がピクンと動いた。

「――翔太？」

「……ママ」

熱で潤んだ瞳がぼんやりと私を探す。

「翔太！ ママ、ここにいるよ」

「……お仕事は？」

喉が腫れているらしく、声は小さく、掠れている。

「悟くんたちがいるから大丈夫よ。心配しなくて良いの」

私は汗で髪が張り付いたおでこを、優しくぬぐった。

「ママ、僕はテツおじちゃんがいるから平気。お店はママがいないと大変でしょ？」

「翔太……」

「パパと約束したんだ。僕は、パパのぶんもママを守るんだ」

テツにいが、優しく私の肩に手を置いた。様子を見ていた先生は、小さく息を吐くと、そっと診察室を出て行った。

テツにいとは病院を出たところで別れた。

「一人で大丈夫か？」

「うん。今日は仕事お休みするから」

「わかった。何かあったらすぐに連絡するんだぞ」

そう言って、仕事に戻っていった。

Edenzに電話をすると、悟くんが出た。

「こちらは大丈夫ですよ。心配しないで下さいね。翔太くんのそばにいてあげて下さい」

彼の声からは、心から心配してくれていることが伝わってきた。他のスタッフたちにもお礼を伝えると、私はありがたい気持ちで電話を切った。

家に着き、翔太を布団に寝かせると卵とねぎがたっぷりのおかゆを作った。それから、冷蔵庫で冷やしておいたリンゴをすりおろして食べさせた。

「——美味しい？」

「うん」

一口ずつスプーンに掬って運んでやると、嬉しそうに甘えた顔をする。

(翔太のこんな顔見たの、いつぶりだったかしら.....)

いつしか私は翔太と過ごす時間よりも、仕事のほうを優先させていた。それは生きていくために必要なこと。だけど、翔太はそれがわかっていたからこそ、わがままも甘えたいのも我慢していたのだ。

(.....私、本当は、それに気づかないふりをしていたんだわ)

薬を飲んで眠った翔太の顔を見つめながら、私の心は罪悪感で疼いた。

(.....ごめんね。あなたは、私たちの大切な宝物なのに)

閉め切った遮光カーテンの向こうはぼんやりと明るい。部屋の中は温かく静かで、翔太の寝息だけが聞こえる。それはいつしか苦しげではなく、穏やかなものに変っていた。それに気づいた頃、私も翔太の隣で、ゆっくりと眠りに落ちていった。

あとがき

あとがき01

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

「あれ、ここで終わり？」と思われた方もいるかと思います。本作は、＜ボリュームが大きくなった＞という理由から、ここで一度まとめようと考えました。

礼子さんのお話としては、まだまだ「？」の部分もありますので、続きはまた書きたいと考えております。

力不足・拙い文章ですが、今後ともお付き合いいただけましたら幸いです。

どうぞ宜しくお願い申し上げます^^

2015/01/16
